

小児慢性腎疾患の予防と管理基準に関する研究

—まとめ—

酒井 糾

北里大学病院 腎センター

研究班が発足し2年が経過した。予防と管理基準に関する研究班もいくつかのグループに分かれて研究を進め手引書作成の作業に入った。以下にその概容を総括する。

(1) 検尿システム研究グループ

腎疾患予防対策の要としての検尿システムについては駿河台日大病院の竹中道子氏が中心となって作業を進めているが、本年度は各地域で行われているシステムの比較検討、さらに診断基準設定に必要となる基礎データの解析がなされた。本年度新たに研究班に参加した慈恵医大の白井信男氏は、地域の腎疾患スクリーニングで見出された症例の検討を行い、各対象についての管理基準の見直しを行った。さらに国立岡山病院小児医療センターの滝正史氏は小児腎疾患患者の長期予後成績からみた生活管理基準の疑問点、問題点を掘り下げ、幾つかの管理基準(試案)を提案した。国立特殊教育総合研究所の永峯博氏は小児慢性腎疾患患児の教育上の諸問題についてアンケート調査を行い、特に体育への参加状況を明らかにし、管理基準(運動処方)作成のための貴重な資料が提供された。神奈川県予防医学協会の五十嵐すみ子氏は腎疾患管理の中で特に早朝尿異常者判定の項目としての尿中NAG活性測定の有用性について検討を行い、医療管理の要・不要判定の一助になるとの見解を出した。

(2) 腎疾患患児・生徒の生活指導、運動処方、研究グループ

横浜市小児アレルギーセンターの長坂裕博氏は血尿単独症例の運動処方に関する検討を行った。今年度は5年以上の長期観察例を対象とし

て予後を左右する因子について、特に発見時年齢、男女差からの検討結果を報告した。この結果に基づいた多施設共同研究が今後予定されている。国立療養所千葉東病院の倉山英昭氏は慢性腎炎、ネフローゼ患児の運動負荷とその予後と題して特に体育指導内容の検討結果について報告した。国立療養所新潟病院の富沢修一氏は腎疾患患児の体育授業による尿変化について検べ運動への参加の妥当性についての検討結果を報告した。国立療養所西別府病院の古瀬昭夫氏は小児各種腎疾患における立位負荷腎機能検査の検討と題して報告し、症例によっては運動負荷の影響が出る可能性を示唆した。国立療養所東松本病院の森哲男氏は小児各種腎疾患患者に対する運動負荷の影響について検べ、古瀬氏同様、症例によっては運動負荷の影響の出る可能性を示した。国立療養所中部病院の水野愛子氏は慢性腎疾患患児における運動負荷の影響について安静時との比較を行い、腎機能に及ぼす早発効果と遅発効果の差を示すと共にその影響の持続の有無について検討した結果を報告した。

(3) 経腸的吸着剤使用による保存的管理、研究グループ

鹿児島大学小児科の二宮誠氏と北里大学の酒井は小児慢性腎不全に対する経口吸着炭素製剤(AST-120)の臨床応用を行い、二宮氏は保存療法期2症例での経験を、酒井は透析療法施行中の2症例での経験を報告し各々の報告でも効果を認めたと強調された。本年度の研究成果は以上の如くであるが次年度はさらにこれらの研究を展開し、いよいよ予防と管理基準についての試案を小冊子としてまとめる。